

# 心優しき縄文人 縄文帰りの勧め

【鉄の雑記帳】 日本人の心のふるさと「心優しき縄文人」の知恵

「利他的精神」について 朝日新聞天声人語にこんな記事が…… 2014.6.1.

◆ 競争社会から成熟社会へ移行する日本に必要なのは「縄文かえり・心の優しさ」では……

ヒューマンを特徴づける「利他的精神」がこんなところにも

2014.5.6. 朝日新聞「天声人語」より

天声人語

おもしろい実験をネットで見ました。2本の高速道路が合流する場合、どうすればすんなりと車線変更できるかを探っている。「渋滞学」の生みの親として知られる東大の西成活裕教授が説明役だ▼車の代わりに人間が二つの道を歩く。合流する直前まで互いが見えない状況ですぐに車線変更しようとする、ぶつかりそうになったり、詰まったりする。危ない。そこで合流地点から一定の距離を車線変更禁止とする。するとその間、互いを見合い、譲り合いながら車線を変えられるようになる▼われ先に走るよりは、まわりとコミュニケーションを取りながら運転するほうが、結果的に速くなる。車間距離を十分に取ることも、ともに、道路の流れをよくするための知恵である▼この実験は「利他的精神実験」と銘打たれている。西成教授が強調するのは、他のドライバーへの思いやりだ。目先のプラスばかりを追わず、長期的視野を持つ。情けは人のためならず。損して得とれ、とも。頭ではわかっていても、なかなか実行できないところが凡夫の悲しさか▼きのう、Uターンラッシュに巻き込まれた方も多に違いはない。きょうも混雑が続くだろう。渋滞のストレスを長時間受け続けるつらさはいかばかりか。どこにも出かけずじっとしていた身には、お気持ちは拜察することしかできない▼大型連休が終わる。朝の駅の雑踏が戻ってくる。遅い流れにいら立って、ともすると前に出たがるのを自戒することにする。急がば回れ、だ。

2014・5・6



**約1万年前に始まる縄文時代 素晴らしい縄文文化が花開く  
 少なくとも約8000年の長きにわたって  
 戦さもなく存続した平和で豊かな暮らしの時代があり、  
 豊かな森や海に恵まれた世界に類のない長い平和な時代が続いた  
 この縄文文化を支えた縄文人たちの心に触れてみたいと。**

人間が人間たる由縁は「他を思いやる心」を持っていること。 現生人類が現代にまで、幾多の苦難を乗り越え、文明を発展させて 今まで生き延びることが出来たのは、この「他を思いやる心・利他的精神」を持ち合せていたからだという。 そんな「心やさしき」縄文人は 世界3大文明に先駆け、縄文文化を花開かせ、日本人の心のふるさととなった。 激しい競争社会が展開させる現在 今一度 この人類史の現実をみつめ直す必要がある。 ややもすれば 自己責任を強要する現代社会への警鐘 こんな身近な例からも社会を考えるヒントがある。

2014.5.6. from Kobe Mutsu Nakanishi



**縄文人の精神世界と深くかかわった「縄文の渦巻き・同心円紋」文化**

# 心優しき縄文人 縄文帰りの勧め

## 縄文がえりの勧め 心優しき縄文の村

2014.5.6. from Kobe Mutsu Nakanishi

幼くしてポリオにかかった少女が 縄文の村で みんなに守られ ずっと暮らしていた

「景色のいい素晴らしい高台に暮らす心優しき縄文人」 「縄文のこころを映すストーンサークル」と  
縄文に魅せられて縄文の遺跡を訪ねはじめて、もう10数年になる。

先日 テレビを見ていたら

「狩猟・採取 自分の食糧確保に精一杯であった縄文時代に  
4000年前の北海道の縄文の村で 幼くして小児麻痺にかかった少女が  
成年期を経て一生みんなに 見守られて その村で暮らしていた。  
その痕跡を示す骨が北海道洞爺湖の近く噴火湾や有珠山を望む入江貝塚縄文遺跡で見つまっている」と。

### ■ 入江・高砂貝塚縄文遺跡



北海道洞爺湖の近く噴火湾や有珠山を望む海岸の高台にある縄文時代前期から後期(約5000～3500年前)にかけて形成された貝塚・住居・墓を伴う大規模な集落。

<http://www.town.toyako.hokkaido.jp/iritaka/index.html>

[http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/dbs/joumon/remains/is\\_iritakasago01.htm](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/dbs/joumon/remains/is_iritakasago01.htm)

### ● ポリオで20歳まで生きた 縄文時代、家族が介護？

西日本新聞 「先人たちのカルテ 病とともに」 2008年11月02日の記事より 抜き出し  
[http://qnet.nishinippon.co.jp/medical/doctor/feature/post\\_673.shtml](http://qnet.nishinippon.co.jp/medical/doctor/feature/post_673.shtml)



1966、67年に北海道洞爺湖町の縄文時代の入江貝塚で出土し、「入江9号」と名付けられた約4000年前の人骨は、頭部が普通の大きさなのに、両腕と両脚が極端に細い。指や足の骨は、長い年月の間に分解し消えていた。

何らかの理由で四肢がまひして寝たきりとなり、筋肉が衰えて運動もできなかったため、骨が発達しなかったとみられる。鑑定した東京都老人総合研究所の鈴木隆雄副所長は「おそらく、ポリオ(小児まひ)の患者だろう」と推測する。

ほかの動物に狩猟・採取の生活をみると

「乳離れするまでは 面倒を見るにしろ

狩猟・採取の移動の中で 群れについてゆけなくなると置いてきぼり」  
それが狩猟・採取の生活の厳しさである。

そんな縄文狩猟・採取の時代に 幼くして小児麻痺にかかった少女が  
成年期を経て一生 多くの人たちに見守られ  
てその村で暮らしていた。



四肢の麻痺があった縄文後期人(レゾリカ) 北海道 入江貝塚 縄文時代前期-後期

「先祖を葬った墓地の広場を丸く取り囲んで竪穴住居を連ねて暮らす縄文の村」「ストーンサークルでの祭」そして「再生を願う渦巻文様」などなどが「戦さを知らぬ心優しき縄文人」の精神生活を示す象徴と言われてきましたが、直接その痕跡を見ることができなかった。

現代人が忘れかけている「こころの優しさ」を見るような気がしています。